

子育てと家族の役割分担〈第1回〉

共働き夫婦の場合

「共働き夫婦」という呼称で夫婦の形態を括られるカップルを、より二人の関係に迫って取材すると、大きく二つのグループに分けることが出来ます。

一つは、夫婦揃って結婚のスタート時から、妻が専業主婦で家に居るといふ発想を一切、持っていないカップル。多くは互いの仕事の内容をよく把握していて、しかも思想と心情共に「人は皆労働し経済力を持つのが当り前の姿である」といった生き方に徹している夫婦。仮に、この在り様をカップルAとしましょう。

そしてもう一つは、妻の側が積極的
に、「専業主婦を選ぶ気は無い」とい
う心情のもと、社会での自分の労働力
を自己実現や自分捜しの手立てとも考

えている。夫は妻の、その考えに一応は賛同、あるいは納得している場合。つまり経済的理由より生き甲斐として働くというケースをカップルBとしておきましょう。

またもう一つ経済的な理由から思想や生き甲斐、自己実現に一切関係無く、働かざるを得なくて共働きしているケースをカップルCとします。

タイプ別役割意識の違い

まず、夫婦で何事につけても、スナリと家事、育児の協力体制が整うのは圧倒的にAのタイプです。

特に同じ職場の組合活動や、サークル活動で意気投合し結婚したという人達には、家事や育児にも考え方の土台



浜 文子

詩人・エッセイスト

【はま ふみこ】出産・育児・教育・介護をテーマに取材・執筆・講演を行う。一貫して現場主義の視線で発信。著作物はNHKラジオ第2「私の本棚」でアンコール放送され、エッセイは高校入試国語科の問題に毎年使用されている。主著に「育母書」「祝・育児」「母になる旅」など他多数。

がピタリと重なり合っている事が多く、その分互いが、言葉を費して、あれこれ語らずとも、分かり合えるケースが多いのです。端的に記せば家事も育児も「分かり合うから分かち合える」とでもいった様子で「男女の固定的な性別役割などといった壁も垣根も自分達には異文化」という姿を体現した生活をしていきます。基本は、話し合います。

家を訪れると、泣く子を背中におんぶして夫は妻の下着を洗濯機から取り出している傍らで、妻は翌日の会議用のためにこんだスクラップの整理に追われている……などという図は当り前の光景です。

このようなカップルの場合、判で捺

したように夫はママで、少年時代から家事をし、生活というものを知っているという人が多く、独身時代も調理器具を整えていたり、得意料理も幾つか持っています。家庭も、一つの基本的な組織と心得て「運営する対象」と認識しているので、生活上にそこから予定外に「逸脱」する非論理が出現しない限り、このタイプのカップルは、子どもの成長に合わせ教育なども語り合い子どもが成人すれば、互いに選り合った生活に満足し、結果、老後の生活へのプランも充実……ということに。ここで述べた予定外の非論理とは、不条理な悩みを抱える状況のこと。具体的に言えば、婚外恋愛を夫が妻のいずれかがしてしまい、そのことで生活のペースや互いの信頼関係が崩れるといったことや、あるいは障害を持った子が生まれたり、親の介護など、そのことで互いの人間観や教育観、ヒューマニズムの根幹といったものをギリギリまで問われる体験を重ねる……等々です。こうした互いの立ち位置を絶えず確認する作業へと向かわせる日常は、夫婦をより結びつけることもあれば、逆に引き裂くものへと変わるエネルギーを秘めています。非論理とは、そのままに既に非論理という名の人を混乱させるエネルギーに満ちたものだからです。

この「逸脱」する非論理について言

えば、B、Cどの夫婦にでも生じ得る事柄ですが、Bの場合で言えば、妻が忙しくなり、家事や育児が手薄になると、その段階で夫の側は、「外で、好きに働いているせいで、家の中がちゃんとしれないのは、どういうことだ!？」と、つまりは「逸脱」するのは自分が好きで働いている妻の非論理——が原因ということになります（このタイプの夫が働きたいと言う妻に口を揃えて言う、分かりやすい言葉が以下です。「外で働いていいよ。家の中のことや、子どものことをちゃんとこなして、その上で働くのなら、キミが働くことに反対しない。好きにしたらいい」。形の上で「共働き」の内実は、なかなか多様、複雑なのです。夫がママな場合はCも妻は平和に暮らせます。

妻の心の求めるものはコレ

共働きの夫婦の場合、多くのケースでは物理的には妻が夫より先に帰宅し、家事をこなすことになるようです。掃除も洗濯も、調理も彼女が担う。だがAの場合は多くの夫は妻の労働量を理解し評価し、その大変さに共感を抱いているという大前提からか自分の手が空いている時は率先して、食器を洗うのでも浴槽を洗うのでも、家事に進んで手を下します。Cも同様に妻が経済力を担っていることに評価とねぎらい

があれば、そうなります。家庭によっては夫の家事労働量が圧倒的に妻に比べて少ないとしても、妻の側は「夫が理解し協力している姿勢」を見れば、その気持ちに納得がいきます。つまり「分かってくれている」という相手の心を受け止められるとき、妻は夫にそれ以上を敢えて言葉にして求めないものです。

Bの妻は、既に前述の夫の「家事育児に支障の無い仕事の仕方なら」という条件付きの台詞そのものに、「結婚、夫婦というものからの不条理」を感じています。なぜなら、「夫婦として互いに協力し合い、理解し合ってこそその結婚生活であり家庭作りなのだから、妻が働く分、そぎ取られる家事、育児への補填はカップルのかたわれとして担って当然だ」と思うからです。

このような場合、妻が求めるのは決して週の半分は夕食作りをとか洗濯と風呂掃除は毎日夫が担う……等々と明文化し、紙に書き出すような要求ではなく、例えば夫の側が勤めの帰りにスーパーで日用品や食品の買出しをしてくるなど「家庭」に目が行っていること、妻のことを気づかっていること、そのことの具体的な証左として、「行動」で、その一部でも現してもらおうといった夫の態度です。



役割を固定化しない

共働き夫婦が巧くいくコツはABC
どのケースでも「役割」を固定化しな
い柔軟な対応、対処が、家事についても、
育児についても出来ていることです。

子どもが小さい時の保育園の送迎に
しても子どもの入浴にしても、そして
寝かしつけるときの絵本の読み聞かせ
などにしても、暗黙の了解で夫婦のど
ちらかがその作業をスッと担うことが
自然に出来る関係が保たれていれば、
それが一番望ましい形です。そして、
夫婦にこのような関係が出来ていれば、
先にいって子どもが成長して家事を手
伝ったり、自分の労働を担うことに抵
抗が無く取り組むという成果が得ら
れます。「協力し合う親」の姿が子の
成長の背景にあれば、夫婦にとつて家
の中の仕事は子どもの人数と成長に比
例して、どんどん楽になります。

私の取材した中にも例えば三人の子
が、それぞれ小学三、四年生になった
時点で、カレーとかチャーハンといった
家庭の一品料理の定番の類なら作れる
ようになったという家が少なくありませ
ん。長男は一年生から風呂掃除は彼の
仕事、長女はやはり一年生で、両親の
帰宅前に米を研ぎ炊飯器にセットして
おくというのが日課だったと、現在高
校生になった子の教師をしている親が

言います（かく言う私も、母は専業主
婦でしたが、祖母が寝たきりとなり母
に介護の仕事が「家事」の一つとして
組み入れられた時から、夕食後の食器
洗いは私の担当でした。小学二年の私
は小さな踏み台に乗り母のエプロンを
胸の辺りまでずり上げ、毎夜きちんと
日課をこなしました。それは父の発案
で母を労^{いたわ}つてのことでしたが管理職に
なり忙しかった父が、母の労働を労^{ねぎら}
う言葉を、私は子どもの頃からよく耳に
していたものです。

共働きの夫婦が本当に大変なのは子
どもがうんと小さい時分の家事と育児
への物理的な時間配分と勤務時間との
すり合わせです。この時期に夫婦とい
うものの基盤がガツツリと作られるとい
っても過言ではありません。ですから
子どもの預け先や保育園選^えびなど、何
事も額を寄せて話し合い理解を深める
ことが大切です。

ご近所の保育ママの活用なども共働
きの夫婦にとつてつい疎遠になりがち
な「地域」に根を下ろし、わが子の特
定な理解者を地域に作るチャンスとも
捉えたいものです。子どもが思春期の
頃に、その子が幼い時分に接した大切
な他者が地域に居ることの意味は、と
ても大きいものです。子どもの存在は
いまや稀薄になっている地域の大人達
の関わりを取り戻す大きな仕掛役とも

なるのです。

女性はメンタルな生きもの、 「言葉」を

Bのタイプの夫で、「共に家庭を作る」
という点に物理的になかなかスナナリ
と意識改革ができない人は（信じ難い
ことですが例えば、この時代でもスー
パーに通勤カバンとスーツ姿で、のこ
のこと入ってなど行けぬという男性は
居ます）せめて休日は食事の後の皿を
洗う……という所からでも家事の世界
に足を踏み入れ、そして次々と妻の労
働軽減へと歩を進めてほしいものです。
それは必ず訪れる定年後や介護の入口
に立つ時分に心から「やってて良かつ
た！」と思う世界だからです。

そして妻に「ありがとう」「おいしか
った」等々の言葉がけを。妻は自分の
家事労働をパートナーに評価、認知さ
れていると分かれば、物理的な疲れ、
ストレスで、夫への怨み、つらみ、憎
しみの海へ身を投げる一歩手前で「明
日も生きて頑張ってみようか……」とい
う気になるのです。

男性は「女とコドモは言葉が欲しい
生きものなのだ」と知っておくべきで
す。夫は恋愛時代、婚約時代よりも、
結婚後の方にずっと言葉を用いるべき
だと、多くの離婚相談を受けての実感
です。

子どもは

「安寧の日々」を求める

夫婦の在り様ようについて色々記してきて、子育てについては言及のペーンが後回しになりました。なぜか——。答えは簡単です。夫と妻の間に信頼感があり夫と妻がより多くの会話を日常的にしていれば（どうでもいい話をたくさん交し合っているかどうかが大事。どうでもいい会話をたくさん日頃から重ねている夫婦は、大事なことを話すときに「モメず」にスナナリといく）その両親の下で日常を送り、育つ子は、放っておいても問題無く育つからです。夫婦関係が安定していれば、子どもの心は自と安定します。その意味で、子どもは「戦いの日々」や「混迷を深める夫婦関係」などが最も肌に合わないひたすら「安寧の日々」を心の栄養に育つ保守的な存在です（たとえ、遊びが非日常的なヤンチャな冒険に満ちているタイプの子でも！）。

求められる

就業システムの見直し

そして夫婦が仲良く暮らすのに欠かれないのは、各々が働いている職場の心理的な環境や就業時間といったシステムとしての「背景」です。このことは今の日本に何よりも必要、且つ早急

に取り組んでほしい事柄と言えます。

ワークライフバランスという言葉にしたところで、日本の場合働く女性のために言われ始めたのが正直不可解で仕方がありません。本当はこんな発想はまず男性の働き方、働かせ方に対して、今もしてもつとずつと以前に問題にされてしかるべきでした。私が育児の最中で日本が高度経済成長をつき進んでいる時分の企業戦士、モレッツ社員という呼称が世の中を席卷していた時も、この言葉を「社会が夫を家庭に帰す発想」として用いるべきだったと（当時から、育児中の妻は孤独でした）。

私が心配なのは、今の時代に両親共にモレッツに多忙で四、五歳までの時期の子が延長保育で夜の九時、十時まで家に帰れないという状況です。そうならない職場の配慮と、労働の見直しが緊急に求められます。夫婦のどちらかが夕方にはわが子を迎えに行ける時間配分で職場の業務をみんなに分け合えるシステムを義務づけるべきなのです。朝八時から夜十時まで、保育園で世話になっていた二歳の男児がストレスから、円形脱毛症になったのを見てきました。また食事の際に、フォークを隣りの子に突き立てようとするのを慌てて保育士が制した三歳の女児は、出張つづきの両親との生活が一年以上続き預け先が保育園と二軒の両親の実家、

友人の家というように日々の居場所の変化も長びいていました。子どもの側から「安定した生活環境を」とは申し立て出来ない分大人たちは、「小さい子の暮らし」「その親の就業環境」を、十分に配慮してやるべきなのです。

子どものために 真に必要な改革

言葉を持たぬ子どもに「安寧の日々」を作ってやれる就業システムを社会が当然のこととして、育児中の夫婦に提供せずに、家庭生活も育児も語るの本来困難というのが現実だという気がします。男性が「仕事が忙しい」という言葉を家庭に参加しない、できない理由や口実にもしない、させないシステムが求められるということです。

共働き夫婦が家庭を運営していくとき、かろうじて、カップルの忍耐や、夫の「マメさやあるいは妻の一方的な自動能力に頼っているのは間違いだということ」を、当事者も世の中も率先して発信していかねばなりません。

就業時間と、労働環境に対する多面的な視点からの見直し、例えば働き方への多様な展開の可能性を探ることなどは保育園を増やし子ども手当を支給し、延長保育の時間をどんどん延ばす配慮よりも、先に着手しなければならぬ問題だと思います。私が出会った

ケースで妻の妊娠中に、夫の単身での海外赴任が決まり、帰国時には子どもが二歳半になっていたという現実などは、妻の心労によるウツと子どもの止まぬチックを見るにつけ子どもが小さい間は夫婦を引き離さず、子どもが就学前の出張や単身赴任、残業は制度として禁止し、経済的にも保障する制度が整えば、何よりも将来日本を担う子ども達の魂が救われると感じます。

若い父親達の意識変化に期待

今から二十数年前、私がパリで小学生の子二人の育児をしていた時でさえ「日本の仕事の仕方は狂気そのもの」と、あちらの友人に評され、彼等にとつてそれは「理解しかねる謎」でした（あちらに暮らしている間は私の夫も仕事を終えてから、ゆつくり映画を観たり、職場の人を夕食に招いたり、結果として夫婦の会話も否応無く増えたものでしたが、彼は帰国と同時に「仕事第一の日本の男」に見事に変容したのには驚きました。

時代が変わっても、日本の職場環境も仕事意識も基本的に何も変わってはいません。そんな中で若い夫達、父親達の意識の変化だけは、かなり期待が持てると感じています。例えば制度が出来たとき、運用する人間の心が変わらなくては意味がありませんが、人の

心が変わり、そのことによって生まれる必要な制度はやがてはつきりと世の中を変える力を持つと信じるからです。最後に、共働き夫婦と、その子育てに何か問題が生じるとしたらお互いが忙し過ぎる状況下にあるとき。家庭は人が寛ぎや安らぎ、慰めや潤いを求めて帰る場です。仕事が忙し過ぎると家庭で心に他を思う優しさも生まれにくく、結果として寛ぎや安らぎ、慰めや潤いを演出する体力、気力はこぼれ落

浜文子先生が執筆された いずれも育児の現場感覚に溢れた本

①「育母書」(メデイカ出版)

発売から十二年。版を重ね、母親達から熱い支持を受けている。産科、小児科、助産師など臨床のプロから「多くの示唆に富む本」との定評も。



ちます。アタマで分かっているもそのように出来なくなります。当然、子どもも心などにもキメ細かく目が届かなくなり、親の就業時間の縛りで子どもが慢性的な寂しさや欠落感を生むことが無いよう、働く父や母が「職業人」から「家庭人」としてメンタルなポイント切り換えを果たせる「時間的余裕」を確保するための社会の意識改革を願う所以です。

②「楽しんで楽になる浜文子の育児」(鳳書院)

サブタイトルは「自家製育児のすすめ」。全国紙に連載した二〇〇回分のコラムを単行本化。「父親不在」は「夫不在」のことと、父親の役割を分かり易くしっかりと記している。

